玉川日記 二編 上

へ 13
3188
4

弐拾壱冊之内

松下

へ 13
3188
4
昭和十 六月二五

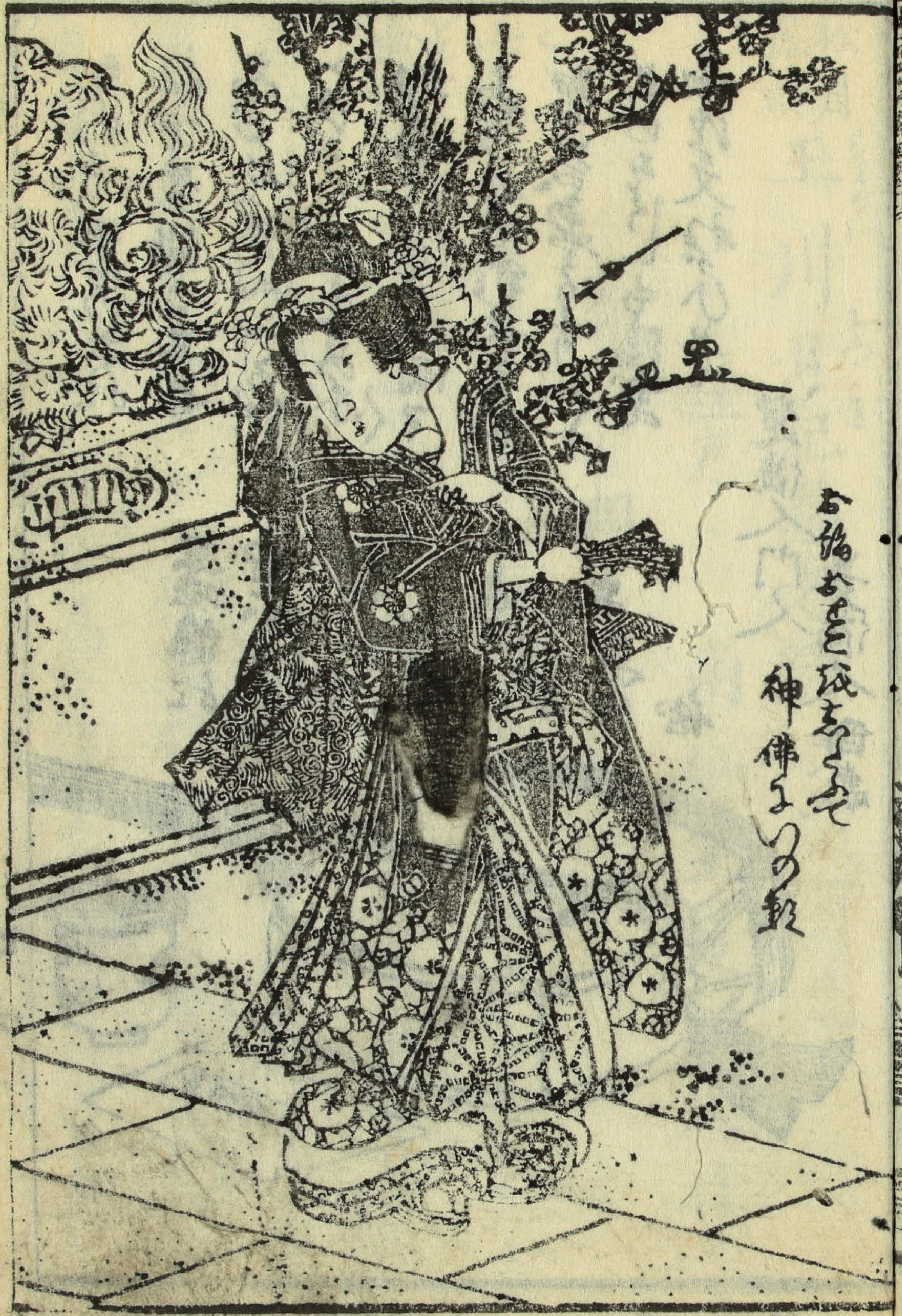
叙

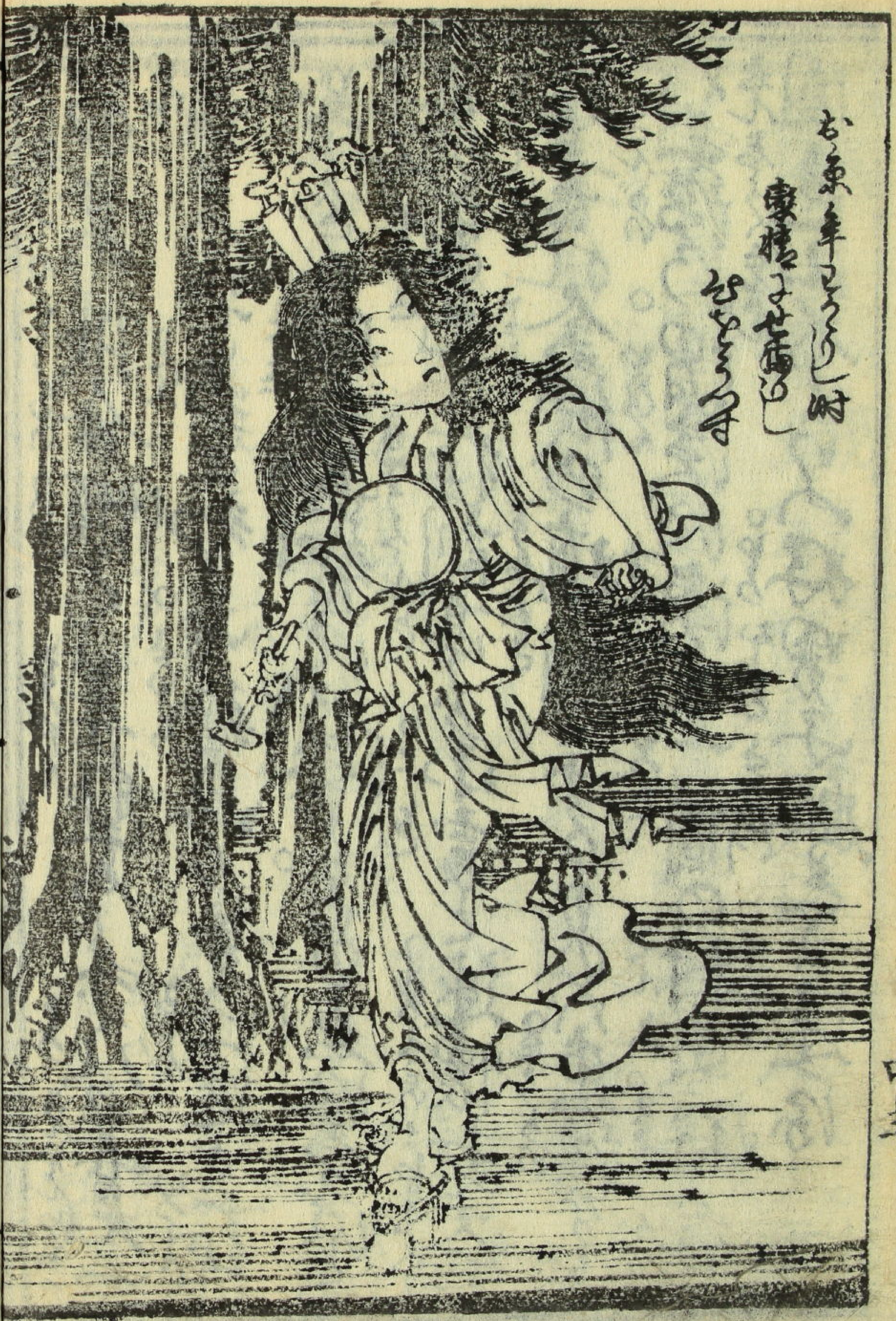
夫笑話ハ君子の取る所にあらずと雖。鄙
諺のみにしあらず雅俗談の害なと成らんよりハ。
道化ますうてもはなしさればまれ子などの
吾妻にきこえ続し。故に都のこ文殊多の
酒屋茶屋をめぐみんさん騒をきわめ
宗なるゝ人今は南仙笑楚満人が一覧へば落

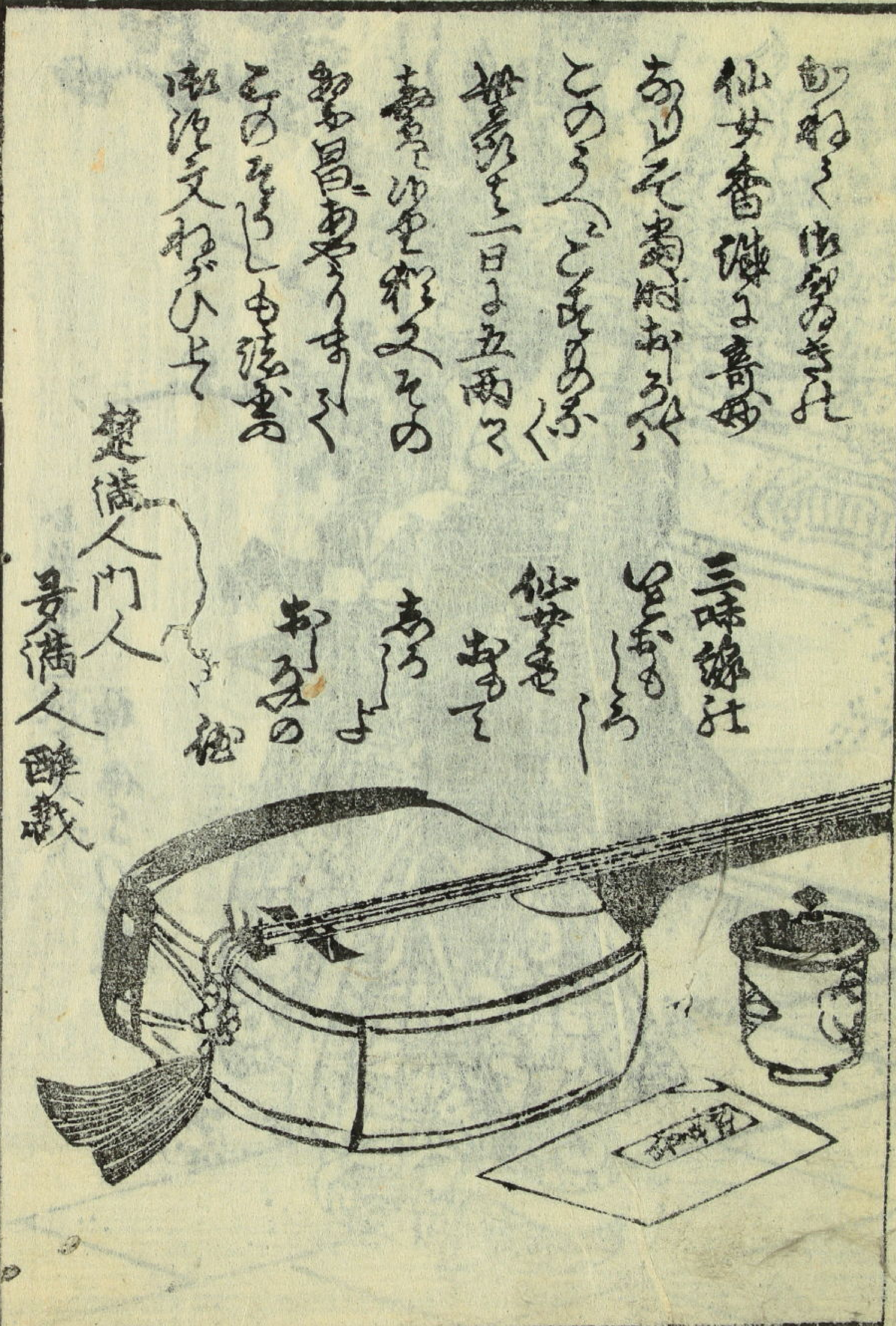
東安楽扇一本の講釈師よりたち
出し。其名雑取乃噺亀西鶴法師に
伝へねども不断新発明に包紙を放さず。
昼は見物当木まで。江戸中を見廻り
夜ハ筆をとらにして机と首引せし。
蛍雪のあかねども散せめて日につく
夜学灯を切積りて忽ち燈皿の油を尽す

書の嗜好を遥龍ともるべし。書
林にて郭をひらくべし、嶋の農ね立てれば
ぞ立や高に走らばと越の國の言く篇読
手衛どのが當れる言。
宝かくいろ確精を早筆でも。實に為
容まさゞるに筆も硯も放下し出し。
さらバとれうち為そと思へど流石仕則へ。

家業。怫合懶く算盤ともず八分當見一
一とうりて事を知るも算盤より手も二進が一十
足しざる時ハ甚賃に及べども。その為に身ぐるを
五郎家兄の狂訓亭が小言を述懐する文で
諸事書は金紙の壇郷にするものゝ東海
ぬ三藩の。渭濱に漁る一個の村史狂香
園色山人といふ好男子戯して述る。







松月露談 玉川日記巻之四

江戸 南仙笑楚満人作

第一回

古語にいへる事あり。士は己を知る者のために死し。女は己を悦ぶ者のために容を作ると。調布の遊家阿糸は深次郎が志を聞つゝむねにせまりて委細をめのがさらんとせしが侍婢時其まで吾に恋慕をなせる人宿世の契りてあるよしを語らばいよく

思ひを増し。煩悩のきづなを断に術なく
さはる上からハ尚さらにいとし思ふ染次郎どの
為ならずと故意と吉五郎が促をさいはひと只何
氣なき体にもてなして其夜ハ皈しぬ。かくて後ハ
あげくハ堀兼屋へも行ず。また染次郎が来る㕝を
ありても今までのごとく親しく物いはず。
疎々しくなりしかバ。染次郎も其儘ならずして歩
すぎしが今歳ハ丁度親井兵衛伊勢太々講に

当つきしかど久く参宮もせざるを恨れバ是幸
染次郎を名代に伊勢へ遣しけれバ染次郎も
父の詞固辞がたく且ハいまだ江の嶋より先の
旅といふものをせざることもなけれバ浮たちて
たる古市の妓楼など見まほしく。誰彼と共に
鹿嶋立して伊勢路へとそハ登りける。爰にまた
調布屋が糸ハ前の客右衛門が信の代金三拾両
余り借る人。沼津なる何某といふ人なれバ

奈何にもまさるとも久しからず。あまりによりて上戸人を
えらず。沼津の駅へゆかねばならぬ事ありつきて王箸
実蔵といふものを誘ひ沼津へとこく發足ね到き
両個ハ江戸を立て往く小田原の駅より雨にふ
りて足柄の関の裏の方をとりて左右より樹
木生茂り昼るもくらき岨道なれバ両個ハ足を
崖ひくこまりにお乗て急ぎしに実蔵と言人
馬士々いさ川くて差実めく道をいそげどお急を

乗る馬士ハ余ほど酔ふとうたふそく 唄「一寒と
壺皿かうなくばヨウドウく。そこの畜生めふ去
わつけといふにひらくとる。チョツいめ人まいのエッ
気がはきて一盃のんで行べいト おまへの強盗ニまり参見さんのそ
お客人の姿をあやしむをよくゐるうち。実蔵がいふハよるりに用心すべきと
お前ハ俺も出らんさきにやしくとらぬやうハこの実蔵がおつけ
ることとなれハまよりに心ハいくぞこともねけれちの「コレサ馬士
ことなりまへハとびかへをさうりとこしを出からず
ぜん供の男ハそれ々行くじやうるのをずつとてー
それも早く中川くおくまで酒が吉くくハさぬへ

はやく泊(とまり)つくから、いくらでも呑(のま)せようから急(いそい)で
ひどくせつく男(おとこ)だな　ト　よびかけハきゝ　うちうなづき　亭主「アニ今
あります。そんなにいそぐことはござんねへ。よ
で往還(わうくわん)がねへから先へいつてもまつくらいさ川
見るりやア遠(とほ)くねへ。男しく往来(わうらい)へハト後(うしろ)から
てふらりくくと参るを　ひくふ気(き)をいらち　おいち「コレサ　そうじやアあるめへ　モウ
日も傾(かたぶ)いて西へいつてしまつたら今に黄昏(ひぐれ)よ
なつたりらうどんな山中(やまなか)でも日でも暮(くれ)たら

ぼつもあるがなけりやいく。ちつとも早く行(ゆき)て
あいエとりの事サ。ムシテ　マア　泊屋(とまりや)のあるところまで
幾(いく)らいかどあるへ　亭主「エイまんざ五六里か
七八里もあんべいから今夜(こんや)の初夜(しよや)すぎふやア
どんな事(こと)をあるくも往(ゆき)まへんい　おいち「十二五七八里エ
そうらアそんな事ござらう。七つ過(すぎ)じやアねへかへ。それで
七八里がどうして日(ひ)暮(くれ)までに歩(ある)かれるものかね。
コレサ馬士(まご)どん。そんな串戯(じやうだん)をいはずと急(いそい)でおくれな。

七三じやア先へいつさまーが供もまだ通りや
付ハあるまいね。そしてもいつて日が暮たら何で
出ますものかね 三吉「十三町さ野が高が猪や狼け
おいと「イヤ氣條のよいのに猪や狼ハ人の付ハあるまいの
かね。三吉「ソリヤア どふも具合が出せね。そんなふ
あんがらツあやるならドレ急いでゞ行ますべい。
ト いつく先ふうくるけやふあるハおどろおぞくあまでくるけゆくふ。
おいとハすでふおちんとせしが先へくらろがあるおりちを後ふ
るにゆめらふからくらく おいと「コレくそんなふいそいでゆかの
あのきなるから

も落そふぐ氣味がわるくてならないわいな。三吉「モウ
ちつと徐ふ歩行く方がよ 三吉「そとの内家へいろ
いろ諸六ヶ敷ことをいゝつかつしやるゆゑ往が
急いで先とをいゝつかつしやるし 又急げが静よ
先とをいつしやる。ぜわしくてならぬさどりまり
らねへ ト
口小言をいつてまじめなとまゞるをまぜしぜ。ふらふらと
歯けハ見ハおのゝまふく葦を分けと岳ふの坂をおすゝみ
おいとハすゝさむそろしさいゞいせんと先ゆきの三吉ふ
むねをいゝかゝむるに三吉ハあたり静ふせつし おいとにむかひ
三吉「モシ内さま
宝ハいしが連の男衆ハおめくへの旦那ゞ人 おいと「ナニサ

あまハまさしが内の番頭らく。今度ふんどどろうらい
うけ合の事が出来て。沼津まで行のサ一両二分ハア
武人ハ嘘ばいいかくしやる。そふしやアあんめへにしよ
あの人ハ些事をして江戸を逃て京坂へでも
行くべいといふのぶん下あてよろしいとんだ事との
人ハえんごとをいふ世之。そんな浮氣らしいおと
ぶやアねへ。そして又しがよる老婆としこれが主
なんぞをするものが。そんな事をいはずと早行く

おくまるアノ男もさぞ待かねて居るであろの空しく
みさろ世之。男の事をあんじさつしやるが左の澄
据ござア。そしてむごアあんぞといふしやるがモノ。
その美しい顔をよまつさあんじやアおざんねへ。
いつもの事今夜遅くハまたしが富人泊らせ之ト
酒をのあする枕にもかゝらんきこゑ。しく夫妻寺の深きの音とぞあれ
ひらき月をむる出ぐすべくる死ていとくあまをそあるれかしくハ
本国に沙汰をあてるをうろぎ極ありくへしかげしき一個の紋人
きちうくあり花をとよろるまうらくしらかくのせんくさらに人ぐ
そのあまをうごしくことまくがや
「とまハしくあるこまるハ調布

屋のお今宿でハござりませねバ。見えますまいバ露
お一個で。お供もお連なさいまず。どちらへおそ
なさいましたト　いふ雅ましバ、そのはなれかゝりし時六とはかへし仏のごとく　なりけまさバお糸ハ地獄でお仏にあいし
よろこび　おいと「ヲヽそふとハ嬉しいじやアないかへ。わたしに
つ
よく逢着くいやつこのまへしハの今度ちかとの
まぬ用で実蔵を供につれまして沼津まで行の
どが実蔵ハ病でござく先へいつてまだし独り跡に
残つて日ハ暮れるし。どふしやうかと思つて

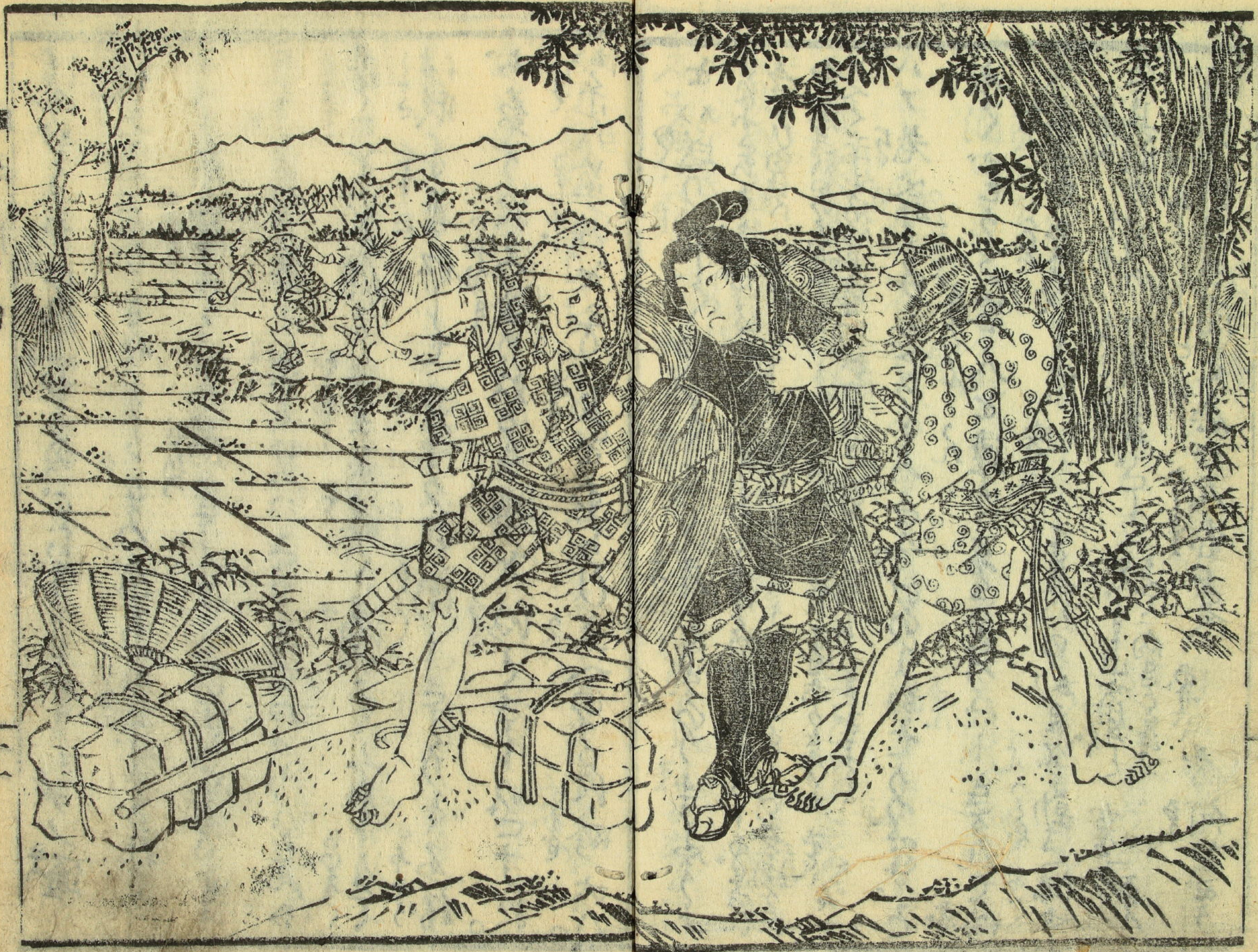
所。どふぞかうしてまアこ旅店のある所ハ七八里もあるそふ
で。うちあのしが家ハとのさまで〜お世話なから今
夜ハとめてあげまいの　亭主「ハイそれハ何より易
い事でござりますか旅店も七八里ハござりませぬが。
まだ二三里もあるのでなさらるのでハござりま
せねから。その事むさいのをおもいなさいまずハ。
私がうちへおとまりなさいまして態々くそ
なさいませト　いふてお糸ハあのぶてくくにあひたがる気ぶりで　亭主「伯父どそれ

でも行末の所まで知られねへじやァあんめへから。
是非とも先の病まで知りてへの　番六「イヤモウ
わつちが江戸へ出た時久しく勤て。エヽ御懇に
なすつた旦那の所の御国宝ぐらゐや酒さかなの
ことわりしやましても一夜や二夜ハおとめ申て御馳
走をしなくちやァなりねへ。それにモウ日が暮れじやァ
あるし。ぜひとも先の病まで知らせるめへかさあく。
後からくやしく早く往ぐが多く　主「それざ

いはく折角ましが　番六「そで四の五のいはゞこれ
で一盃のんで待つしやましとりのおト　もつとも二年をおもふなる
亭主ハせんのごとくぶつくさと小言をいひつゝおのれもすゝめてのまぬ番六ハ酒を見送り
番六「エヽアノ
飛脚め酒ふくらひよつくいやァがつていろくな
盃をまだ知らしねへくどもいはねへがいゝぜラ
一向どうもさしにいろいろな事をいつてとぼろ。
てしくぞよあまりうと思つた所へ折節お客人が来
てるまでこので。誠に地獄で仏とはいひすぐ

最前より一五一十を詞せはしく噺をおそ
嶋六ハ聞て 一九「それハおめづらしい事でござりま
すさ座めつたにもいさしまぬものが多くあるもの
めハ酒の上があるみござりまするが酔しまするみ
事をして○藤容兀をおまへさまより[illegible]りしさんり
ますせね実蔵どのが先へ参りましたとやてあるで
一筋ならぬどうも書ねば事ハござりませぬから且お
まへさまハ私と一所におのぞみなされまし。私があるさ

をお送りやしてかのくらら尋てまゐりますト
きゝなさるとき聞するにおいらハ[illegible]あれどもそのひをかし[illegible]
あさがひめげが二三十にも七十よりもあげる本意のうちおいらがしけある[illegible]
あり嶋六ハおのとぞ[illegible]のくうちにいるにうちにいる[illegible]女房にもて一ヤレ
ひえく幸[illegible]の[illegible]の[illegible]をさのくいたうじ[illegible]をらへく
ハア巻爺どのゝくらしへこけのよおそろしいこッた。そ
ろくござりやう客人を連て来さっしやるトきられて嶋
六大さまを案内して 一九「こなハのおまへが勤た江戸
の旦那の所の内儀どのと[illegible]山女郎[illegible]まで一向[illegible]女房へ一反
ござんし江戸の団子屋の金毘羅ども 嶋六「そりや何をぞう



はんがんめ。御閑室などとおつしやりまし。アノ通
繕ぐございますから。まつぴら御免なされまし
イヤナニ鉢算のうへハ無筆でめつたにございます
。からつきし用といふハ足りませぬ。さりとてそんな
喉もとを過ぎれば御豆を煮ぐ湯でも冷めて手を
仕形を真似して見ますに。漸くさしつて不錆
お釜すに大釜のぬるま湯を汲みましてございますに。
お糸ハ草鞋をとり足をあらひ上へあがるに跡六八。

独り気をもちら飯をすゝめ。さまざまもてなすにお
糸ハいとゞ気の毒におもひ「コレく世話しくして
くださりますな。斯かして必ず行きなき人の
野良まあがり何よりの御馳走でございます。必ずお構ひを
なさるなといふ。それでハこゝろのまゝ。「イエサどう
ぞくつろいでやしくてても御覧なすつて通りの山家
でございますから。なにもあるまいとのめしあがり
まするかなのハございませぬ又おあがりなさりま

する事が有ましてもありますし寝場へまゐりつく
何ぞ寛々まゐつくおきますが。何をいたしても
不意の事でござりますゆゑ。どんな事も有ませト
いふともひ一ツぽの雑者とお気ハ厚く礼をのべ
寝ころびながら行末幾方の事をぞ案じゐる
ふと眼六ハまめしく　おせん「ハイ内室さま実ハ
ぢのも嘆先へまゐつくあるての事を案じておりますぞ
ござりましやうから私が一走りまゐつく知らせく

まゐりません　おとく「イヤモウ日も暮てなよしお
ちつでよいのでハありろ　おせん「イヱそうでござりませぬ。
翌日になると知れませぬ何の日が暮ましたが
不所ありつけさんとその事もおそろしい事も
ござりませぬ。縁なまりますまいが私ハ先の病へ
通つく実蔵どのと翌早くろへまゐりまして案じ
なさいまし。コレ嗅くや頭なともなかなか気をつけ
中せ。内草臥なさいましてお寝なさいまし。ごろ続き

かくまでまたせ。かくまで帰るまでばさくくら。待ども寝
いたく疲れなりしツイート走りてまゐりましてまゐりましたト寒
さあらせね岩丈荒爺山路をいそぎ行ける。

第二回

斯てお糸ハ師匠お孫にて。吟六が帰るを待ながら寝
まんじりともせず蒙などの手居ぎりしが諸事まで斷も
なし得ず退屈のあまり深次郎が宿を思ひ出し寐
人ハ伊勢の太々講より京大坂大和廻りして行し

見聞しが定めし名高き遊女の都ハ琉球町も殊に
多く東とそかれく女ハうつくしく物優しけ
れバ今頃ハさぞさかりなく出世でもいそぎて又ひとへを
尋ねどもめぐらバ父母の歎きハいかばかりならんと。おもひ
すごしなく漫ろに涙を拭ける折しも門の戸を
やさしくおとづるゝ者あり。お糸ハ立て戸を開つけく
夫吟六が帰つたと見えて。扨表をそくよりざう。
明てやるべしといふト

大変な事をしていのちあやふく戸をあけまへバ吟六でハなく一下人の旅荒僧侶一の手紙

ゆくふ人のなふ　女房「ヲヤおまへらハどうして来さしつた。
女房ハおどろき夜る夜中真の裸で狂人じやアねへかトいへバ彼
前婆ハ面目なげに「ハイ私ハ様の者でござり升が
此山中で盗賊に出會まして此通りに剥とられましたさ
ハさぞ難儀いたしますがどうぞお慈悲に一夜の
宿をおかしなさつて下さりませト乞どとすれバ
断れ一向きかしず　女房「イヱ〳〵うちへハそんな
者ハとめハやせぬ早く皈らッしやい。爺さんござ

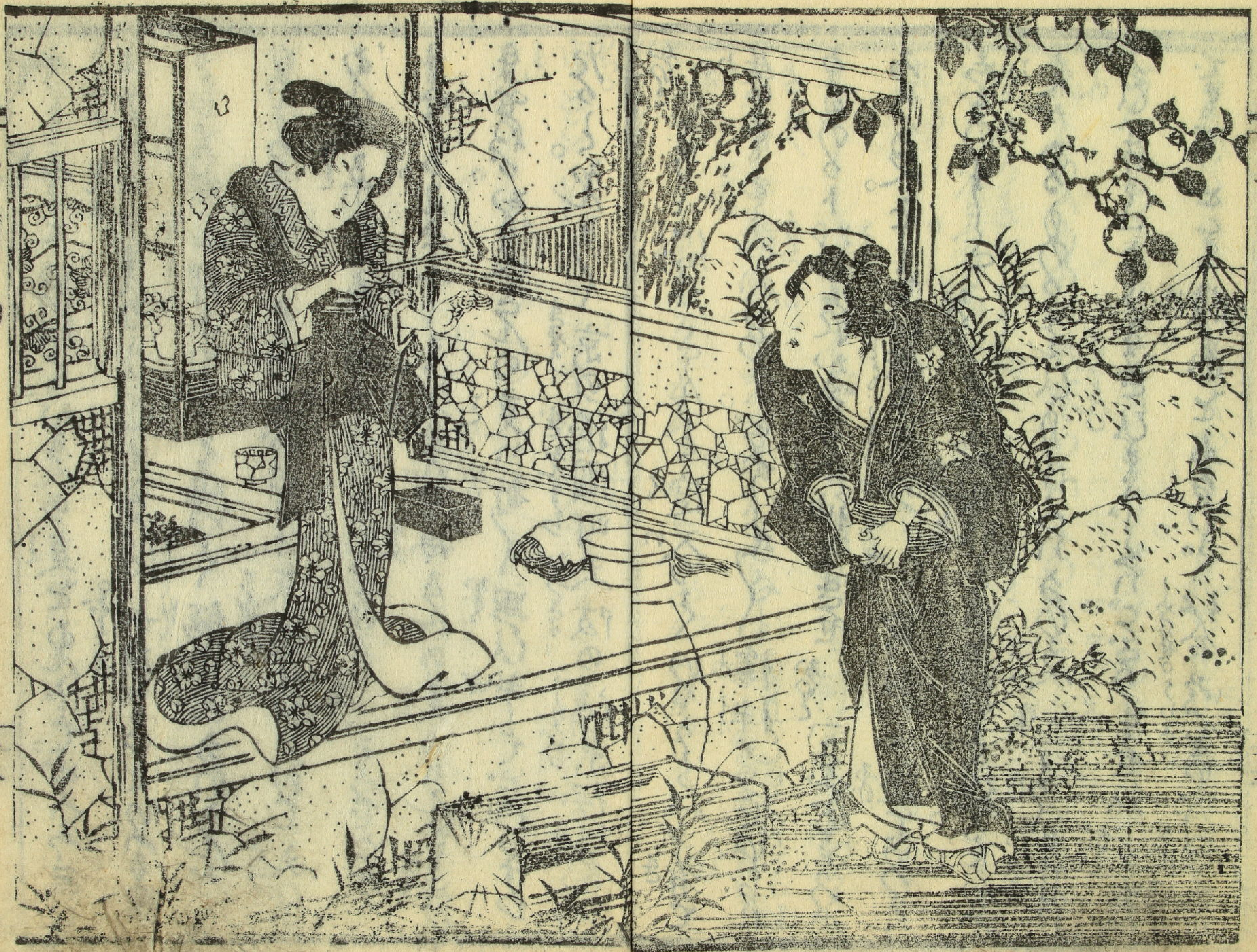
る。見れど狂人が来て伊勢参りのじやといふやト
宿。ハこちらへハござらぬといふてよろしくいへト
とつても承知れね挨拶に少年ハ猶もいんぎんに「宿程
真の裸で夜る夜中まゐつたれバ怪我あつしよもを喰
子も畏しめしませうが全く其の者でハござり
ませぬ盗賊に出會ましたに相違ござりませぬ。
どうぞせめのおかしやしずに灰小屋の隅へなりと今
宵一夜おとめなされてくださりませト誠心顔に

わらいけるに。お糸ハ小話をきく聞居たりしが不便に
おもひ。いかなる人ぞやと窓の障子透間より見るに。豈はかる
らんや主ハ蝋燭屋の染次郎なれバ驚くこと大かた
ならず。悦しく走り出「染次郎さんじやアない
かトいはれて喫りよく見て染次郎「ヲヤなんで
おまへさんハ調布屋のお糸さん。どふして爰に お糸「アイ
ことしハちつと無拠用があつて沼津まで来る道
すがら。おもはず爰へ泊り合せて。そのうちハ私が

以前ほうこうした男の家。今あそこでおまへの様子ハよそ
ながら聞ました。さぞお寒かろう。まア／＼とうちへお這
入なさい何にも御遠慮な所でハないよトいひつゝ女房が耳へ口をよせ
このお人ハわたしが家の親類のうちの息子
さんだが大事なのよ。かつくどうぞ今夜ハとめて
おくれトいへど亭主ハきかぬゆへ女房「さんざんこの
お人ハうちのおんなで大事のむすこぞへ。
さんの御息子さんが此ぐらいまでとのたづねてあつた

まるでこの人。ハイ〳〵おまへさんのお子さまならずの
ぶんよりしうござりますサア〳〵あがりなさい
兎角このめハ此寒いのによい元気なる。ハイ〳〵〳〵ト
何かひとり義理しでうちへはいるおまさ
おたくもやんどあるあるようかゞのそいろ
おさと「染さん此ぶりアまさんハ
算ござる。その寒さぐくお出よマア〳〵寒うござろかありし
まさしも彼ふとゞまらく。荷物も何もなかったら
着替も持ねとまでもおきなト おれが着ている小袖を下ねのくあさあれば
染「十二サよござりますよ。おまへさんそまでへいかぞう

おさと「イエ〳〵綿がさんと追入のくいるから一ッ着て
居ても寒くハないよ。ぞめしてもし傍伴でいられ
るものかトむかへかへ糸が小袖をきせ おさと「さぞさむかろ
うねへ。そして御供の衆ハ 染「ゆうへ逃ていつく
夜まのましさ おさと「ヲヤ〳〵マア旦那さまをおいて逃るといふ
事があるものか。またひまどりなの人 染「イエ〳〵日暮に
なりましたから。まごひまどっくハござりませぬ おさと「それ
でもマアどこも怪我をなさらず仕合。満足をいへバ浮気な



今も今といはく。お主人の事を見じてござります
上方ハ女がみんなうつくしく。如才なのといはれる
から。おや女郎ふでもよくて飯も旦那の名が
いはるる事がなければいいと天道さまがけて大
もんじ子をそへてなさるとてハかなへ 染「それでござ
ますかさえしも父さんや母さんの事ハ見習
ませぬが。お主人さんの事ハ折く思ひ出してござりまする
なると見えて。京の祇園町大阪の新町伊勢の古
市ぐらゐいつても若や御亭入もあるかと思ふて楽て
見ましたが。そうといふもお主人さんは似た女もござり
ませんト。いふはお糸も胸が痛く顔も赤ずに居たり
たり婆ハ気の毒氣して 女房「おやおやどのも今夜ハ
まつくまつるかも知れません。モウお休みなされませ。
といふこ所がごろりごろりとうちの人がござりません
から。着てげしまるものも漸く爺と私がきりの
事でござりませぬ。下へハお主人さん方の召物を着るの

かほりに愛でげしありませ母さんの支うればひさし
ぶりで江戸一所に抱いて寝て。お乳でもあがりませ。
いくらくりてこんしもモウ寝ませうト そこへ枕を出まりにし その身ハ納戸へ入りにく
ねるかりそめなく新ぞうと ひとしれくさとこへ入りけり
おいと「サアく涂さん寝なんしやすあい
涂「ハイおまへさんと一ッ夜着にえ おいと「そんじやア
あのらぞふもこふいふ君がふあつくこの寒いふ 枕が
。いさうと一ッ入ハふたりまかづくまとく寝るのもあし。
たとへ二人り一ッ所ふ寝るのとも ところえ清れまいはそが

うの支もなんおもうのト。いひつゝ一重帯にかうく
裳もあらハに雪より白き内股をちらくとあら
いす姿。涂次郎ハひと甚う気思ひ 涂「おいとさん
そうちやアあんまりおまへさん胴慾といふものでござり
ます。いつぞや身婚ふまのりまして 郎夫とふちに
なりくふ如して見るもおひぞれぃお詞おつとまで覚
到しくをまで吉五郎が来て。死なくれそれからら
よのおがあつてらぱ。わるくと思川でもそまうう後に

いつそのハ私がうちへもお出なさらず又私が方から
邂逅いつても兎角さけして私とさしむかひになら
ぬやうになさるゝハ私のやうな事が御家にさはらうかとおもへ
ますとおそろしうて居てもたつてもゐられぬといへハ
ぞいの因果でかやうと咄ぐ心が志まりませぬ只今
もおかしうしやうして京大坂ハおろかなる吏唐天竺
へまでゝもあなたとのけくさく〳〵の煩ことゝいふ
者がどざりましやうか。それハ今 物のいのちから

なりまして只二人さしむかひで一ッ夜着に寝るまで
も思ひを晴すこともならぬといふハよく〳〵えんの
縁とおもへバいつその事最前盗賊に逢て殺されたら
きよく死ねバよかつたと思ひまして涙をこぼせバ。
いとしや今そなたが哀なはなし「ほんに〳〵のこなた
見るかげもない姿をさらしてまでおまへのやく
おんなさりまするといふハ有ても難いそれもの
そいひよのハどざりませぬが何をやも先ごろく

おまへのしことまでり恩と義理とにせがまられまして。どうもうんともいはれぬ義理そこのあふとこぞ今迄も。おまへさんの深切なところざしを無にしてはすまぬとおまへの所へもゆかず。おまへの案ることもとぐおもはずしたりなどして。まるく顔をあはせねよふにしてのがれていましたも。みんなおまへの為をおもふよりし深の縁むすびぞ。一ツ夜着に寝るといふも前生からの約束れがたきも思ひがけなの所でおまへさんとこゝし

事でござりますトいふに染次郎もいとゞ哀をまして　染「つらからうが只一ト筋にほらうしみなから。なまじいそのよふなやさしい事をいつてくださるのはますますよふく思ひがましますぞへいつその事義理をしらず悪性ものといはるゝが思ひ切りよいもどうでござりませふト誠心あかす染次郎が詞におもはずもいとゞなるを涙にくれてしのぶなる鳴咽いふにいはれぬ浮世の人情とてふいきかく他評の批判豈らく

おやぢどろかうんや。

玉川日記（たまがはにつき）巻之四終